

『女大楽宝開』解説

C・アンドリュウ・ガーストル

パロディ春画

『女大楽宝開』(以下『女大楽』)は六三丁(二二〇頁)を超える比較的大部な一冊で、月岡雪鼎(一七二六―一八六)の作・画と考えられている。本書は江戸時代におけるセクシュアリティの実践と認識の双方を理解するために重要な情報源である。十八世紀後半になると教訓書をパロディ化した艶本がいくつも制作されるが、本書はその最初であった。

雪鼎による同趣向の艶本は他に『艶道日夜女宝記』(明和元年「一七六四」頃、日文研叢書44)、『女令川おへし文』(明和五年「一七六八」頃、日文研叢書40)の二冊がある。いずれも同じ「日文研叢書」シリーズとして影印・翻刻・翻訳がされており、オンラインで閲覧・入手可能である⁽¹⁾。これら三冊は全て、著名な教訓書のパロディという体裁をとり、原作の本文を性生活におけるユーモラスな文章へと一変させている。

『女大楽』は、当時影響力のあった女性向けの道徳的教訓書である『女大楽宝箱』(以下『女大楽』)を巧みにアレンジしている。『女大楽』に代わるような女性教育のためのいきいきとした痛快な教訓書となるように、原作の大部分の図版と本文を土台にしてもじり、またオリジナルよりも更に幅広く性に関する様々なトピックを取り上げている。両書の図版と本文を並べてみたとき、いかにそのパロディが切れ味良く、巧みなものであるかは誰の目にも明らかである。言葉遊びと機智に富んだ発想で古

典的な詩も含まれる本文が効果的に好色化されている。本書のパロディは、男性のいない場で働く女性たちの場面を、性愛を楽しむ逢瀬の場面へと転じさせる。イメージとテキストの両方においてパロディを成立させるために細部にまでこだわって大変な労力を費やしているが、それは単純に刺激的な「ポルノ」的書物を作るために必要な作業の域をはるかに超えている。その目的は間違いなく、性生活における女性のたのしみを否定した堅実で儒教的な教訓書『女大楽』に対抗して、面白みのある代替の教訓書を提供することであった。

江戸時代の歴史的資料と女性のセクシュアリティ

『女大楽』は、とりわけ京都と大坂において教訓書のパロディという新たな春画のジャンルを生み出し、それらの作品群は十八世紀末まで作られ続けた。別のパロディ艶本『枕童児拔差万遍玉茎』(安永五年「一七七六」)には、性教育の代表的書物として『女大楽』の表紙の図版が含まれており、本書がいかに春画の言説の中で重要なものとして見なされていたかを明確に示している。筆者はこれまでに雪鼎によって作られた『女大楽』やその他の艶本が女性向けの一般的な道徳的教訓書と継続的に対になる言説を生み出したと主張してきた⁽²⁾。さらに十八世紀後半になると、雪鼎の影響は江戸の絵師にも及んでいる。近年ようやく、アカデミックな場や博物館・美術館の世界においても春画に対するタブーがなくなりつつあるが、しかしそれは、社会史や文化史の学者がこれまで江戸時代の社会を調べる時にこれらの情報源に気づかず、あるいは江戸の社会を理解するために見当違いなものだと考えて、無視してしまってきたことを意味している。これらの多くのパロディ春画(艶本)

やその他の一般的な春画は、江戸時代の——特に女性の——セクシュアリティについて、様々な言説を私たちに提供してくれる重要な歴史的資料である。

『女大衆』は、女性の性生活における様々な局面を扱っているが、遊里を舞台にした短編小説や恋文の見本集の章とならんで、性道具や男色、諸国の遊里における陰間・遊女の値段などの情報も含まれており、より幅広く「性と性行為の百科事典」とみなすべきものである。本書にはいくつかの構成要素があり、はじめの二章は女性に焦点をあてている。一つは夫婦間におけるセックスと性欲に関する論であり、もう一つは三十種以上の異なる職業に就く女性のセックスを図と会話で描いたものである。女性が結婚し夫の家に移ることを前提とする考え方は、原作・パロディのいずれも同じである。しかし、義父母へ従順することを強調する原作の本文に対して、『女大衆』では女性自身の最も重要な原理として自分を魅力的にみせること、夫との親密な関係を保ち続けることを奨励している。

男と女のセクシュアリティの諸相

女性のセクシュアリティに焦点をあてた最初の主要な章が終わると、見開きの画面が平行に三分割された構成となる。一番上の段は男女の観相学が記され、真ん中の段には「若衆仕立様の事」、下段には「美女三十二相」が配置されている。「美女三十二相」は『艶道日夜女宝記』にも含まれている。「三十二相」は、理想的な女性の身体についての詳細な論で、髪や唇、胸など体の様々な部分に最もよく使用される形容詞は、「丸々」、「むっちり」、「丸き」、「丸く」など曲線的で肉感的なものである。

このテキストから、十八世紀の美しい身体に対する考え方と京都や大坂で制作された美人画のモデルという問題について見直しをつけることができるだろう。

三段画面構成の章の後は二段構成となり、下段には女性の裸体／着物姿が並んで描かれており、上段は扇を使った恋占いの図解となっている。それに続いて、上段では「色道実語教」として性生活の欠点について洒落のきいた対句を並べている。最後の下段は、恋文の見本集となっている。平行する上段には江戸から九州に至るまでの諸国における遊女の値段が詳細に記されている。その後は大坂の遊里を舞台にした洒落本の短編となっており、男女を問わず本書の読者に遊里の中の生活の一端を知らしめている。また、分散して収録されている小さなセクションとして、性道具、前戯のテクニック、多様な性器の分類・分析などがある。

男色——男性同士のセクシュアリティ

男色のセクションは、最初、女性向けテキストである本書のなかで場違いにみえるが、実際、男性が若衆を買うための準備方法を記している。男色は、基本的に年上の者（念者）と年少の者（若衆）の間で交わされる一方の性的慣習であった。若衆の初心者を買春のために準備するプロセスは、青少年を傷つけないようにする方法についての淡々とした説明となっている。

筆者は、春画における若衆の表現に関するエッセイの中で、十八世紀の様々な春画作品では男性同士の性関係を一般的な議論の余地がないものとして積極的に提示しているが、一方でその言説は売春や成人男性が若者にセックスを強要する慣習を乱用することを批判していると論じた。⁴

京都と大坂で制作されたこの時代の多様なパロディ春画（艶本）は、異性愛者と同性愛者の結婚や契りに重点を置く傾向があるが、売春には批判的である。『女大楽』には、諸国の遊里に関する広範囲なリストが含まれているが、記されている情報は商品としてのセックスの値段のみである。雪鼎によるパロディ春画の基本的なテーマは、あたたかい夫婦関係における性のたのしみを理想とし、売春は愛情を伴わない単なる性交渉とするものである。

出版年、絵師、作者

好色本の出版を禁じる出版条目が享保七年（一七二二）に発布された後、ほとんどの艶本から作者、絵師、出版年などの情報を含む刊記がなくなった。『女大楽』については、『女大学』の新版が宝暦元年（一七五一）に刊行されたことにあわせて、一七五〇年代初めに出版されたとされてきた。しかし、以下の二点からもう少し遅い刊行であったと考えられる。

『女大楽』の出版年

(1) 『女大楽』に含まれる短編「さとげしき」の本文は、洒落本『月花余情』とほぼ同文である。『月花余情』はもともと寛延三年（一七五〇）に私家版として出版される予定であったが、版元によって板行が中止され、ようやく数年後に刊行された。『洒落本大成』では、本書を宝暦七年（一七五七）刊行と推定している⁽⁷⁾。

(2) 『女大楽』にある「男女人相の善悪」は、洒落本『艶史人相秘事真告』に含まれている「艶史人相七品考」とほぼ同じである。中野三

敏は『秘事真告』の刊行年が宝暦七年（一七五七）前後であると推定している⁽⁸⁾。本文は類似しているが（ただし『女大楽』には和歌が付け加えられている）、図版は異なるもので『女大楽』よりも大きく（本書は一六×一〇cm）、細かく描き込まれている。これによって、『女大楽』の刊行はこれらの洒落本とほぼ同時期の宝暦六、七年（一七五六―五七）であったと考えることができる。

『女大楽』の図は月岡雪鼎によるものと一般的に考えられている⁽⁷⁾。雪鼎が本文を書いたと確定することは難しいが、雪鼎は自画作で絵本をいくつも制作していた学究的な絵師であり、和漢の美術や春画に関する歴史の考証を行っていたことも知られている⁽⁸⁾。雪鼎画と考えられている艶本において本文と図の内容は破綻なく呼応しており、それはおそらく作者が雪鼎であること、あるいは少なくとも作者と密接に協力しながら制作していたことを示唆している。

（石上阿希訳）

注

- (1) 「日文研叢書」シリーズ40 (<http://doi.org/10.15055/00005229>)、および44 (<http://doi.org/10.15055/00005146>)。一九九八年に太平書屋から出版された『女大楽宝開・女大学宝箱』には、『女大楽宝開』の本文のほぼ完全な翻刻と影印が含まれている。
- (2) C. Andrew Gerstle, "Analysing the Outrageous: Takehana Shunchōsai's *Shunga* Book *Makuru doji nukesishi manben tamagaki* (Pillow Book for the Young, 1776)." *Japan Review*, no. 26 (2013), special issue: *Shunga: Sex and Humour in Japanese Art and Literature*, p. 177.
- (3) 拙著『江戸をんなの春画本——艶と笑の夫婦指南』平凡社、二〇一一年。
- (4) 拙稿「春画における男色の描写」『もう一つの日本文学史』国文学研究資料館編、勉誠出版、二〇一六年、一四九―一七〇頁。

- (5) 『洒落本大成』三巻、中央公論社、一九七九年、三七一―三七二頁。
- (6) 『洒落本大成』二巻、中央公論社、一九七八年、四一五頁。
- (7) 雪鼎の艶本『女令川おへし文』（明和五年「二七六八」頃）については、A・ガーストル・早川聞多（編著）日文研叢書40『近世艶本資料集成IV 月岡雪鼎・1 『女令川おへし文』の解題（日・英）が参考となる。
- (8) 山本ゆかり『上方風俗画の研究―西川祐信と月岡雪鼎を中心に』藝華書院、二〇一〇年、Timothy Clark, C. Andrew Gerstle, Aki Ishigami and Aiko Yano, *Shunga: Sex and Pleasure in Japanese Art*, British Museum Press, 2013（日本語版 小学館、二〇一五年）。

参考文献

- 『女大楽宝開（全） 女大楽宝箱（抄）』太平書屋、一九九八年。
- C. Andrew Gerstle, trans., *Great Pleasures for Women and Their Treasure Boxes & Love Letters and a River of Erect Precepts for Women by Tsukioka Setei*, Hollywood, CA: Highmoonoon, 2009.
- アンドリュウ・ガーストル『江戸をんなの春画本―艶と笑の夫婦指南』平凡社、二〇一一年。

謝辞

国際日本文化研究センターには、春画研究、とりわけ本シリーズ出版への長年の御支援に感謝申し上げます。今後さらにこの特色が継続することを願っています。私個人のことでは、日文研外国人客員研究員制度のおかげで、本書へ向けた研究をすることが可能になりました。早川聞多先生と石上阿希氏が『女大楽宝開』を読む研究会を催してください、そこに矢野明子氏、アマウリ・ガルシア・ロドリゲス氏、リカルド・ブル氏らも参加して議論したことが、この書の複雑な構造を理解するための有意義な機会となりました。早川先生はいつも、テキストの翻刻、解釈、江戸文化一般のことなどで、惜しみなく私たちに知識を分け与えて下さいました。石上氏は春画史の諸側面についての研究を通じた新たな春画解釈で、『女大楽』の理解をいっそう豊かなものとしてくれました。また、日文研出版係にも御礼申し上げます。とくに伊藤桃子氏、松尾有希子氏は、翻刻においても翻訳においても本書を正確なものとするために最大限の努力を払い、原書と春画パロディとの関係を読者が深く味わえるようなレイアウトを考案してくださいました。そして本書の影印に御所蔵本の使用を快諾くださった浦上満氏にも、ここに深く御礼申し上げます。

二〇一八年九月

アンドリュウ・ガーストル